
ねこちゃん！

和桜白兎

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ねこちゃん！

【Nコード】

N0476BA

【作者名】

和桜白兎

【あらすじ】

シゾンタリアに子猫がやって来た・・・だけの話（汗）
特に何をするわけでもなく、物語は進むのです。
ちよっと切り取ったお話。

シゾンタリア生活10日目。

犬舎の寝床の一角には、大きな青い毛玉がひとつ小さな青い毛玉がひとつ。

大きいのはランバードで小さいのはラピードだ。どちらも犬。

現在軍用犬と将来軍用犬。因みに親子だ。

その小さい毛玉、ラピードの隣にもうひとつ毛玉があった。

ラピードよりひとまわりもふたまわりも小さく、大人の片手にすっぽり収まるような大きさの

黒くふわふわな毛玉だった。

大きい青い毛玉が大きな身体で小さな欠伸をひとつ。

無言で俺の存在を確認した後朝日を眺めてから小さい青い毛玉を鼻で突っついて起こした。

起こされた小さい青い毛玉は小さな身体で大きな欠伸をひとつ。

俺の方を向いて「わん」と一声挨拶した後、

朝日を眺めてから自分より小さな黒い毛玉を鼻で突っついて起こした。

黒い毛玉はとがった耳をぴくりと動かして身を起こし、ラピードにほお擦りした。

小さい黒いその毛玉は

「にゃん」

俺を見つけて、一声鳴いた。

「子猫ね。」

「子猫よね。」

かわいいかわいいと騎士達を虜にしたその猫は、勝手に騎士団の敷地に迷い込んでしまった

ようだった。

ランパード・ラピード親子は快く受け入れて自らの寢床の一角を貸し出し、餌まで分け与えて

いたらしい。今朝まで全く気付かなかったが。

我等が隊長は3日前くらいには気付いてミルクやら与えていたらしい。

暇潰しだと言っていたが、執務室の机の上には書類の山が広がっているのを

掃除に入った俺は知っている。

ユルギス達が声を枯らしながらも隊長を探す姿は誰もが知っている。

そしてそいつらの死角を突いて逃げているサボリオヤジがいるのを誰もが知っている。

連日真面目に世話をしている俺でも今朝気付いたんだが、このサボリオヤジが真っ先に

子猫を見つけていたというのがなんだか複雑な気分だ。

仕事しろよ、隊長。

ランバードがラピードを咥えて運ぶのを真似するように、ラピードは誰が教えた訳でもなく

その黒い子猫の首元を咥えて移動していた。子猫の事をたいそう気に入っているようだ。

その姿が住民達の微笑みを誘う。

親猫も見つからずこんな小さな猫が一匹で生活できる訳がない、と子猫の世話は騎士団に

回ってきた。騎士ってそんな面倒なこともすんのか。

そして

「あー、子猫の世話もよろしくな、ユーリ」

俺、めちゃくちゃ忙しいんだわ。

暢気に頬をかきながらのたまった隊長の一言が俺に突き刺さった。

「なんだよなんだよ、騎士ってもっとする事あるだろ！魔物退治とか治安を守るとか

犯罪者捕まえるとか！」

だん、と手に持ったグラスを机に叩き付ける。中身はジュースだ。だって俺、未成年だし。

騎士団の生活は俺の想像とかなり違っていて戸惑うことばかりだ。

まず朝起きる。

全員で整列し、点呼

午前中は主に交代制で街の見回りか、体術・馬術など、主に体を使った勉強。

午後はまた交代制で戦術論、隊列の話やら魔物の話・・・主に座学。ちよつと休憩をはさんでから倉庫の武器たちを隅々まで磨きこむ。

時間が空いたら犬の世話、掃除、掃除、掃除、犬の世話の連続だ。

それに猫の世話が加わるらしい。俺は掃除と動物の世話をするため

に騎士になった覚えはない。

酒場で愚痴をこぼす。世話を拒否したものの、受理はされなかったのだ。

ああ、面倒事はいつだって下っ端に回ってくる。コネも何も無い下っ端に回って

くるのだ。

「いいじゃない、あの子猫、とっても可愛いし！」

「そうそう、ラピードの傍から離れないのよね。どうせ世話任されてるんだから

一石二鳥じゃない！」

「いやー、可愛い後輩が来て残念に思ってたら、可愛い子猫がやってくるなんて。

天は私達を見捨ててなかったわ。」

「そうそう、癒しよねえ。」

ヒスカとシャスティルはまるで他人事のように俺の言葉を受け流す。
なら代わかってんだ。

俺の態度が気に食わないのか、神経質なフレンが口を出した。

「ユーリ、隊長はしっかり考えて君に任せたんだからそう物に当たるのは止せ。」

これも任務なんだからしっかり取り組まないと。」

「へいへい、将来有望な騎士サマとは違って俺はペット達とのんびり戯れてるよ。」

なんだよ、この扱いの違い。親父が騎士だったからって、お前鼻根され過ぎだろ。」

フレンの顔が目に見えて引きつった。

こいつの父親が騎士だった、というのはザーフィアスの下町にいたときから知っていた。

下町連中から頼りにされる変わった騎士だった、らしい。

その仕事っぷりを見たわけでも無いが、こいつの父親なのだからきつと何をやらせても

そつなくこなす優秀な騎士だったのだろう、勝手にそう思っていた。

騎士団の中でフレンの父親がどういう立場かということを知るのは
今よりずっと後の話。

フレンの憤りの理由を知るのはもっと後の話。

喧嘩と喧嘩と喧嘩、後に仲直りの毎日だった。

シゾンタニアを離れる10日前。

あれから月日が経ったが子猫は一向に成長の色が見えない。

「にゃー」と、使われなくなった犬舎の一角を見つめて鳴いて、俺
に訴える。

暗く寂しい一角を見つめながら言葉を探す。

「いなくなっちまったんだよ。アルゴスもジョンも・・・ランパードも。」

子猫はわかっているのかいないのか、首をひとつかしげて黙り込んでしまった。

ランパードという言葉聞いて、耳をピクリと動かし寄って来た小さな相棒を抱き上げる。

子猫は寂しそうにきゅんきゅん鳴く子犬を慰める為、俺の膝に乗りながらその

小さな鼻っ面にほお擦りをする。

ついでに俺の手にも擦り寄って来た。

どちらがどちらの世話をしていたのかわからなくなる図だ。

少し前まではラピードが親のように接していたのに。

俺もあの子猫に慰められた気がする。多分気のせいだと思うが。

自分に言い聞かせるように2匹に話しかける。

「明日は俺、来れないからな。餌はちゃんと置いとくから、喧嘩すんなよ。」

ラピード、父ちゃんの仇、打ってやるからな。」

まるで話を理解したかのように2匹は元気に返事を返した。

俺、騎士団辞めたから。

何故か仲間たちに知らせる前に真っ先に犬猫二匹に報告してしまっ
た。

自分でもどうかしてると思う。

ラピードに、亡き英雄のキセルを渡すと喜々として啜えた。勿論火
は付いてない。

俺たち禁煙者なんで。

ラピードはキラキラした目を輝かせ、いつものように着いてくる。

…ラピード貰えないかってユルギスに聞いてみよう。

黒い子猫はきょとした目でこちらを見た。

「……お前も、来るか？」

どうせシゾンタニアからは人が居なくなる。

こんな状態で放っておけない。

新しい家がこいつにも必要だ。

子猫は尻尾をゆらりと動かしてからにゃん、と返事をした。

（後書き）

なんかごめんなさい。

年の最後に何か作品を投稿したかったんだ・・・！

劇場版は結構うる覚えクオリティ。

ユルギスさんが結構お偉いさんで合ってるよね？多分！

結局私はカロールを見つけられなかったのだ・・・。

題名はエステルが「ねこちゃん！」って呼んでいるのをイメージ。

なのにエステルのエの字も見えないのは何故。

連載は・・・保留です。もし気が向いたら連載小説としてアップする可能性あり。

でも、きっと物語は一切変わらないだろう・・・（汗）

私の書いた文字達を見てくださるあなたに感謝いたします！
そんなことをつくづく思う今日なのです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0476ba/>

ねこちゃん！

2011年12月31日23時45分発行